

老舎『茶館』札記

辻田正雄

〔抄録〕

『茶館』の直接的原型は『秦氏三兄弟』であるが、老舎はアメリカ在住の頃から茶館を舞台にした話劇の執筆を構想していた。そして新中国成立後の社会的、政治的変化を作品に反映させることを作家としての任務と考えていた。『茶館』も例外ではない。政策として普通話の推進が盛んに提唱されると、老舎も積極的に呼応し、作品に北京方言の使用を極力抑えるようになる。『茶館』のことばは北京方言がほとんど無く規範的である。それにもかかわらず話劇が北京味を感じさせるのは、音のリズムを重視した、俗諺、軽声、儿化の適度な使用によるが、これらも多用しているわけではない。『茶館』のことばの面での成功は、演出家や俳優を前にして老舎が行った朗読によって可能になったのである。

キーワード 北京方言、軽声、儿化、規範化

1. 問題の所在

老舎 (1899-1966) は「同時代の言語芸術の大家」⁽¹⁾ と称された文学者である。『駱駝祥子』などの小説創作のほかには話劇脚本創作でも著名である。かつて脚本『龍鬚溝』(1951年) によって「人民芸術家」の栄誉奨状を贈られたこともある⁽²⁾。1950年代に発表された話劇『茶館』は老舎の代表的劇作のひとつである。

老舎の文学言語については、作品の「ことばは生き生きとしており、北京方言は老舎の創作に大きな役割を果たしている」⁽³⁾ という評価に見られるように、北京方言の巧みな使用を老舎の文学言語の特長とする考え方が一般的である。

ところが『茶館』のことばについては、「『茶館』の言語は規範化されている」⁽⁴⁾ という見解がある一方で、「『茶館』には北京以外の土地の観衆あるいは読者が理解できないような方言は無いが、『茶館』の北京味は『龍鬚溝』と同じように濃厚で少しも減じていない」⁽⁵⁾ とする見方もある。俳優の黎頻によれば、老舎は『龍鬚溝』の時には詞語ばかりか語音も北京味であることを要求し、俳優に例えば「王大妈」の発音を「王大mei」（「大」は重音、「妈」はmeiで軽読）

とするようにさせた。しかし『茶館』ではそのようなことはなかったという⁽⁶⁾。

本稿は、老舎の『茶館』についてその口語を中心に考察を加えようとするものである。すなわち、北京味を出している口語が北京方言なのか普通話なのか、そして話劇である以上、上演されるにあたって演出家や俳優がその口語をどのように表現しようとしていたのか等を中心に分析を進める。

2. 『茶館』の原型

『茶館』の脚本は雑誌『収獲』創刊号（1957年7月）に発表された。『茶館』の原型となる作品についてはいくつかの説が出されている。原型だとしてこれまでとりあげられた作品は『人民代表』『一家代表』『秦氏三兄弟』『人同此心』である。まず『茶館』の原型について検討してみよう。

a. 『人民代表』説

老舎夫人の胡絮青は『人民代表』の第一幕が『茶館』の第一幕の原型だと述べる。胡絮青によれば、老舎は『茶館』より以前に『人民代表』という数幕もの話劇を書いたことがあり、北京人民芸術劇院の下稽古のために準備していた。しかし『人民代表』はうまくいかず、正式には上演されなかった。のちに『茶館』を書く時に、特に第一幕では老舎は『人民代表』のストーリーや人物を転用した。そもそも『茶館』創作の最初の意図は、中国の最初の人民憲法と関係があるのだ、と言う⁽⁷⁾。これは老舎が次のように述べているのを承けているのだろう。老舎は「私は『人民代表』という劇を書いたことがあります。かなり精力を注ぎました。その後ボツになりましたが、少しも惜しいとは思いませんでした」としたあと、のちに『茶館』の第一幕で『人民代表』のなかの一場面を使ったと述べている⁽⁸⁾。

しかしながら『人民代表』の脚本は発見されていない。『人民代表』は執筆されたのか、あるいは他の作品との記憶違いであるのかはよく判らない。次によく似た題名の『一家代表』説をみてみよう。

b. 『一家代表』説

『茶館』の常四爺を演じた鄭榕は、『一家代表』を原型だと述べる。鄭榕は自分の体験を回想して証言している。

1951年に『龍鬚溝』の公演が終わってからスタッフの大部分は土地改革に参加した。残った少数の人間で老舎の『一家代表』の下稽古が行なわれた。だが劇は公演されることはなかった。鄭榕は「この作品が、老舎先生が『茶館』を構想した最も早い萌芽」であろうと推測している⁽⁹⁾。

陳徒手は多くの関係者にインタビューして次のように整理している。

1956年8月、曹禺、焦菊隱、歐陽山尊らは『一家代表』の脚本を老舎が朗読するのを聞いた時、曹禺はそのうちの第一幕が非常にすばらしく生氣あふれているが残りの数幕はそれほど

もないと感じた。相談の結果、曹禺たちは茶館の劇を基礎にした数幕劇で茶館を通じて社会全体の変化を写し出すようにした方がよいと考えた、というのである⁽¹⁰⁾。

『一家代表』は、1951年、雑誌『北京文芸』に第一幕のみ発表された⁽¹¹⁾。『茶館』が『收穫』に発表されたのが1957年であるからかなり時間差がある。しかも『一家代表』の時代設定は1949年の新中国成立の前後4年間であり、『茶館』の第一幕の時代設定である1898年と大きく異なる。何よりも『一家代表』には茶館の場面が存在しない。おそらく『人民代表』との混同か記憶違いであろう。

c. 『秦氏三兄弟』説

『秦氏三兄弟』は雑誌『十月』1986年第6期に発表された。これは、1986年4月4日、老舎長男の舒乙が老舎の遺品の手稿のなかから発見したものである⁽¹²⁾。

于是之は『秦氏三兄弟』が『茶館』の原型であると断言する。1956年、『秦氏三兄弟』の初稿が完成すると老舎は北京人民芸術劇院に来て、曹禺、焦菊隱、欧陽山尊、趙起揚、刁光覃、夏淳らに朗読して聞かせた。曹禺らは脚本の朗読を聞いて、第一幕第二場の茶館の場面が生き生きとしており精彩を放っているが他の部分はそれほどでもないという意見で一致した。それで、この第一幕第二場を基礎に更に発展させた劇にしてはどうかということになった。茶館のような場所は社会の変化を最もよく反映できるからである。この意見を老舎に伝えたところ老舎も同意し、三ヶ月で『茶館』の脚本を完成させたという⁽¹³⁾。

『秦氏三兄弟』の第一幕第二場は茶館の場面である。この茶館名は『茶館』と同じ北京裕泰大茶館で、登場人物及び会話もかなりの部分が『茶館』と同じである。『秦氏三兄弟』の第一幕第二場の茶館の場面を基礎に更に内容を発展させたのが『茶館』であると考えてよいだろう。『老舎文学詞典』も『秦氏三兄弟』を『茶館』の前本としている⁽¹⁴⁾。『老舎全集』も簡潔に解題とも言うべき説明を加えている⁽¹⁵⁾。『秦氏三兄弟』を『茶館』の直接的原型と見做して問題はないであろう⁽¹⁶⁾。

d. 『人同此心』説

それ以外の説も見ておこう。その他に『人同此心』が『茶館』の原型だとする意見もある。鄭榕によれば、中国全土ではじめて普通選挙が行なわれた時期に、老舎は普通選挙を題材にした『人同此心』という脚本を書いたことがあり、この第一幕第二場が大茶館を通じて戊戌政変を反映したものである、という⁽¹⁷⁾。ここにはいくらか混乱がある。まず、これはbで引用した鄭榕の記述と矛盾する。またここで述べられている『茶館』の原型部分については、『人同此心』を『秦氏三兄弟』に替えればcで見た于是之の証言と同じである。またbの陳徒手の整理も『一家代表』を『秦氏三兄弟』に替えれば同じ内容である。

『人同此心』は1951年2月から6、7月にかけて執筆された映画脚本である。1951年当時、電影指導委員会の秘書であった齊錫宝が『人同此心』の責任編集者兼老舎助手となっていた。齊錫宝が『人同此心』のことを覚えており、老舎長女の舒濟が老舎故居より手稿を発見した⁽¹⁸⁾。

『人同此心』は「歴史の大転換のなかでの中国知識人の心の変化を描いたもの」⁽¹⁹⁾である。事の経緯は次の如くである。

『人民日報』に中国共産党や新政権に対する見方の変化を綴った知識人の文章⁽²⁰⁾が発表された。これを読んだ毛沢東がこれを題材に映画を撮るべきだと述べた。毛沢東の意向を受けた周恩来が齊錫宝に連絡し、齊錫宝が陳波児などの上司と相談して老舎に映画脚本執筆を依頼したというものである⁽²¹⁾。

『人同此心』には茶館の場面はないし、内容も全く異なる。『人同此心』は『茶館』の原型ではなく鄭榕の記憶違いであると思われる。

以上 a～d の検討からも判るように、おそらく『茶館』の原型については多くの事柄が混同され同一人物でも異なった証言があるなど記憶が混乱している。老舎は茶館を通じてひとつの時代を描くことを考えてきた。康濯は、老舎がアメリカにいた頃から北京の茶館を描き、ひとつの時代を書くことを考えていたと語ったことがあると証言している⁽²²⁾。また『龍鬚溝』の第三幕第一場は、時期は1950年夏、舞台は三元茶館という小茶館である。ここでも茶館が舞台になっている。『茶館』を舞台にした場面があるという意味では、『龍鬚溝』にも『茶館』の萌芽が見られると言えよう。

1957年12月19日、『文芸報』編集部で『茶館』の座談会が開かれた。そこで焦菊隱は「第一幕はもともと普通選挙に関する初稿のうちの一場面であった」⁽²³⁾と述べている。ここで言う普通選挙とは1953年から54年にかけて行なわれた全国人民代表の選出のことを指すのであろう。普通選挙と対比させるつもりで『茶館』第一幕で戊戌変法の失敗が背景とされているのかもしれない。

老舎は新中国成立後、社会的、政治的变化を作品に反映させることを作家としての任務と考えていた。文芸と政治的任務が問題になった頃⁽²⁴⁾、老舎は次のように述べたことがある。

「もし高度な政治的熱情があり新しい事物に深く入っていく敏感さがあれば、われわれは確実に短期間にちゃんと書くことができるであろう」⁽²⁵⁾と。

政策に積極的に呼応しようとする姿勢は『茶館』の場合でも例外ではない。『茶館』の原型についての混乱は老舎のこのような姿勢ゆえに政治的テーマとの関連で関係者の記憶に混乱が生じたのであろう。

3. 『茶館』の公演と演出

北京人民芸術劇院はこれまで5度『茶館』を首都劇場で正式公演している⁽²⁶⁾。

第1次は1958年3月29日初演で7月10日まで公演された。焦菊隱と夏淳による演出である。第2次は1963年4月、焦菊隱と夏淳の演出。第3次は1979年2月、夏淳演出。第4次は1992年7月16日、夏淳演出。第5次は1999年10月12日、林兆華演出である。

1963年の公演は政治的に少し複雑な状況のもとに行なわれた。1963年1月に再公演が決まって下稽古に入ることになった時に、まず整理小組を作り記憶に頼って1958年公演時の復原作業から始められた。そして1963年版では話劇の思想性を高めるために「紅線」を加えることが要求された。「紅線」とは全体を貫く革命思想の紅い糸の謂である。この「紅線」を加える作業は、童超、英若誠、于是之が担当することになった⁽²⁷⁾。1963年4月2日、老舎はこの「紅線」が加えられたものを見たが、このことについて一切意見を出さなかったという⁽²⁸⁾。

これは演出を担当した焦菊隠が置かれていた政治的立場と関連があると考えられる。焦菊隠は北京人民芸術劇院副院長であった。北京人民芸術劇院は合併によって1952年に創設された。院長には曹禺が就任し、副院長は焦菊隠と欧陽山尊と趙起場の3人であった。焦菊隠はかつてフランスに留学しパリ大学文学博士号を取得しており北京師範大学文学院院长をつとめていた。欧陽山尊は欧陽予倩を父にもち、抗戦時期の華北人民文工団の流れを汲む。芸術性を重視する焦菊隠は欧陽山尊との関係はあまり良くなかったらしい⁽²⁹⁾。反右派闘争で、焦菊隠は「保護を加えながら批判教育する」対象となった。整理小組を取り仕切ったのは欧陽山尊である。1963年に「紅線」が加えられたのは焦菊隠の反右派闘争での体験も関係しているかもしれない。また、作品に人民の革命の力が十分に描かれておらず階級的観点にかける、として作品の思想性に批判が加えられた⁽³⁰⁾ことも影響を与えたと思われる。『茶館』の公演を実現するためには、当時の政治状況からは「紅線」を加えることが必要であった。加えられた「紅線」の内容は第二幕と第三幕が中心であるが、第一幕については、茶館の客の会話部分で、教会が大眾によって破壊されたことや譚嗣同の維新に対する共感を語るといった内容を加えるというものであった⁽³¹⁾。

1979年版は1958年演出本を基礎にしている。1963年演出本は参考にされたが、これに夏淳や俳優たちの記憶を参考に加え、1978年再版の脚本に基づいて調整を加えたものである⁽³²⁾。大きな変更は1963年版で加えられた部分が削除されたことである⁽³³⁾。

1992年版は「さよなら公演」と呼ばれるもので、于是之はこれを最後に舞台を下りた。以上の4度にわたる公演は、老舎の説明や意向を直接聞いている人が中心になっているが、次の1999年版は違う。

1999年版は林兆華演出によるもので、主として『収穫』版脚本に依拠し、新たな試みとして第三幕に実物の乗用車を舞台に乗り入れさせている。

4. 脚本と俳優

老舎は現場の意見も参考にしていた。演出家や俳優などに自分の意図を説明したり、また逆にかれらの意見も取り入れて脚本を書き直すこともしていた。焦菊隠は次のように述べている。

「作者の老舎先生は絶えず稽古場へ来てみんなと脚本について意見を交換し、身をもって模

範動作を示したりもしました⁽³⁴⁾と。

老舎が何よりも重視したのは、自分の作品を朗読するということである。朗読を重視することを老舎はこれまで何度も語っている。老舎は青年労働者を対象に創作について語ったことがあるが、そのなかで朗読に言及している。「文を直そうと思えば書いた文章を何度も音読しなければなりません。音読するとは朗読するという意味です。文字は紙の上に書かれるとその音が良いかどうか、ことば遣いに不自然さが無いかどうかは簡単には判りません。どうしても声に出して読まなければならないのです⁽³⁵⁾と。声に出して読むということは書き上げたものに限られるのではない。老舎は「紙に書く以前にまず声に出してみてそれから書く⁽³⁶⁾とも語っている。

曹禺は次のように述べている。

「(老舎は)北京人民芸術劇院のために多くの脚本を書きましたが、どの脚本の場合も下稽古の前に老舎は俳優を前にして自ら朗読しました」。そして「朗読し終わると、みんなに意見を求め、意見が出されるとすぐに脚本を書き換えました⁽³⁷⁾と。

『茶館』の時も同様に老舎は朗読している。焦菊隠は「脚本が完成すると老舎先生はいつも同じように、演出家や俳優たちを前に自ら朗読しました⁽³⁸⁾と述べている。

もう少し具体的に見てみよう。

1957年12月2日、老舎は北京人民芸術劇院に来て、すべての俳優を前に新作『茶館』を朗読した。12月3日、老舎は演出家と俳優に『茶館』の主旨や構想について語った。1958年3月5日、『茶館』の通し稽古を見た後、老舎は俳優たちの中に入り「王掌櫃の喋り方はもう少し老成した感じの方がよい」など自分の意見を述べた。

以上は北京人民芸術劇院の資料に残されている⁽³⁹⁾。

『茶館』のセリフは俳優が自ら独自性を発揮できる余地があった、と王朝聞は述べている⁽⁴⁰⁾。次に俳優や演出家の意見が取り入れられた部分を見てみよう。

舞台で馬五爺が十字を切る場面は脚本にはない。これは俳優の童超が最初の下稽古の時に即興で演じたのだが、焦菊隠がこれを採用したものである⁽⁴¹⁾。

まだ第一幕の最後の場面は『収獲』創刊号に発表されたものと大きく異なっている。特に「將、你完了!」で第一幕が終わるという処理は焦菊隠の演出であるが、老舎はこの処理とその後の解釈が気に入りこの通り脚本も書き換えている⁽⁴²⁾。納得できれば演出家や俳優の意見を虚心に受け容れた、と夏淳も同様の証言をしている⁽⁴³⁾。

5. 『茶館』のことば

『茶館』の第一幕の評価は高い。

張恨水は、第一幕を評価した王瑤の発言を承けて「私も第一幕はよく書けていると思う⁽⁴⁴⁾

と第一幕を評価したことがある。

陳徒手は焦菊隱の評価を記している。焦菊隱は、『茶館』の第一幕は「不朽の名作」で、「わずか十分ほどの劇で数十人もの人物を生き生きと描き出している」と記していたという⁽⁴⁵⁾。

曹禺も「劇を書く人は誰でも知っているが、最も難しいのは第一幕である。『茶館』の第一幕はすばらしく、永遠に伝えられるべき文章である」⁽⁴⁶⁾と絶賛している。

冉憶橋は老舍劇作の第一幕を分析し、登場人物の短いセリフからも人物像が浮び上がると第一幕を評価している⁽⁴⁷⁾。

以下、『茶館』の第一幕のことばについて分析を加える。

音声資料は次の①を基本にし、その他②も使用した。また必要に応じて③を参考にした。

① VCD 北京人民芸術劇院1992年公演版話劇『茶館』

② VCD 北京人民芸術劇院1999年公演版話劇『茶館』

③ 1979年公演版拼音文字化資料⁽⁴⁸⁾

脚本の版本は『老舍全集』第11巻所収のものを使用した⁽⁴⁹⁾。

[引用一覧]

i. 〈 〉は略称。ii. 略称の後の数字は同書のページ数。iii. 配列は略称の拼音順。

〈儿〉：贾采珠编《北京话儿化词典》语文出版社、1990年9月。

〈高〉：高艾军、傅民编《北京话词语增订本》北京大学出版社、2001年4月。

〈口〉：张继华编著《常用口语语汇》北京燕山出版社、1988年8月。

〈瀨〉：瀨上恕治『北京官話萬物聲音』德興堂印字局、1906年12月。

〈鲁〉：鲁允中《普通话的轻声和儿化》商务印书馆、1995年5月。

〈弥〉：弥松颐《京味儿夜话》人民文学出版社、1999年1月。

〈拼初〉：《汉语拼音词汇（初稿）》文字改革出版社、1958年12月。

〈齐〉：齐如山《北京土话》北京燕山出版社、1991年1月。

〈俏〉：周一民《北京俏皮话词典》北京燕山出版社、1992年5月。

〈俗〉：徐宗才、应俊玲编著《俗语词典》商务印书馆、1994年6月。

〈文〉：舒济主编《老舍文学词典》北京十月文艺出版社、2000年2月。

〈戏〉：陈建文、王聚元主编《汉语戏谑语词典》上海人民出版社、2001年1月。

〈现汉〉：《现代汉语词典》商务印书馆、2002年5月修订第3版（增补本）。

〈现汉78〉：《现代汉语词典》商务印书馆、1978年12月修订第2版。

〈徐〉：徐世荣编《北京土语辞典》北京出版社、1990年4月。

〈阎〉：阎崇璜「老舍《茶馆》词语浅释」『中国語研究』第23号（采華書林、1984年9月）。

〈张〉：张继华《北京地域文学语言研究》四川人民出版社、1999年9月。

〈作〉：杨玉秀《老舍作品中的北京话词语例释》北京大学出版社、1984年5月。

(一) 詞語

『茶館』の中の詞語等について、多く北京語として注釈がなされている。この注釈及びいくつかの北京方言辞典や研究書等と規範的な辞書等との比較を通じて、『茶館』の詞語について見ていこう。以下、最初の数字は『老舍全集』第11巻のページ数を示す。例えば、276-20は276ページ20行目にこの用例があることを示す。また『現代漢語詞典』に収録されている詞語は、それぞれ最後に(現漢)と記す。

- 276-20 甩闲话 *shuǎi xiánhuà* 甩闲话,此字面原义系闲谈之话,但说人短处之话亦曰闲话(齐25)。旁敲侧击,指桑骂槐(高772)。
- 276-22 爷 *yé* 旧时对有身份和一般男人的尊称(高939)。(现汉)
- 276-23 外场人 *wàichang rén* 见过世面,知情达理,讲情面,善交际的人(高841)。“外场”的“场”要念第二声阳平 *cháng* (弥252)。(现汉)
- 276-25 抖威风 *dǒu wēifēng* 显示,夸耀自己的声势或气派(作36)。
- 277-12 眼拙 *yǎnzhuó* 视力不好,多指一时认不出熟人(宋742)。(现汉 *yǎnzhuō*)
- 277-14 噓 *zhè* 噓是旧社会卑者对于尊者或下级对于上级的应诺声,表示服从,恭顺(阎)。(噓)は原来満州語より変ぜしものなるを以て重に旗人の側に用いられ漢人は重に是を用ゆ(瀬37)。(现汉)
- 277-15 候 *hòu* 请客人吃饭,自己付钱说“候”,是“候帐”的省语(徐179)。客气话,意为代人付钱(作56)。
- 277-16 圣明 *shèngmíng* 在口语里,“圣明”算是俗语。“明”字一定要轻声。“圣明”系恭维语,多用在第二人称敬称的“您”上(弥217)。(现汉 *shèngmíng*)
- 277-19 邪 *xié* 奇怪(徐429)。
- 278-2 老娘们 *lǎoniánmen* 或 *lǎoniármen* 指妇人,含轻蔑意,是不美的语言(徐238)。(现汉 “老娘” *lǎoniáng* (方))
- 278-3 待会儿 *dāihuǐr* 等一会儿(文755)。(现汉 “待一会儿”)
- 278-6 早班儿 *zǎobānr* “您~呀!”是早晨在外相遇时的客套话。意思是出来得早。并非“上早班”之意(徐469)。
- 278-13 伺候 *cìhòu* 在人身边服侍、照料,供人支派、指使(作22)。(现汉)
- 278-15 两儿八钱 *liǎngér bā qián* “儿”字轻声,附于“两”字之后(*liǎngr*) (阎)。
cf. “块儿八角 *kuàier bā jiǎo*”,钱数不多,一块或少于一块(文719)。
- 278-23 心眼里 *xīnyǎnrli* 内心深处(作140)。(现汉)
- 278-24 丫头 *yātou* 女孩子(作142)。(现汉)
- 278-27 红的不得了 *hóng de bùdéliǎo* “红”象征成功、顺利、走运、幸福或受人重视、欢迎等(作55)。(现汉 “红人”)
- 280-3 咂摸 *zámō* 砸摸:思索、考虑。也作“咂摸”、“咂磨”(作155)。(现汉 *zāmo* (方))

- 280-8 觉乎着 **juéhuzhe** 觉得〈作69〉。
- 280-9 这年月 **zhè niányue** 当前这个时代〈文732〉。(现汉)
- 280-9 这么 **zènme** “这” **zhè** “么” **me** 常变读为一个音节 **zèm**〈徐472〉。
- 280-10 您哪 **nínna** 北京土语习惯，把对对方的客气称呼置于句尾，加用“哪”为助词〈徐298〉。
- 281-8 闲在 **xiánzai** 安逸；舒适。旧社会以“闲在”为羡慕、赞美的客套语。无论对老年还是青壮年〈徐421〉。
- 281-11 学 **xiáo** “学” **xué** 用为助词时的土音〈徐424〉。
- 281-11 指 **zhǐ** 倚仗之意〈徐486〉。(现汉)
- 281-14 街面上 **jiēmianrshang** 家庭以外，公共场合〈作65〉。(现汉〈方〉)
- 281-14 人缘儿 **rényuánr** 招人喜欢的性情、风度等〈高711〉。(现汉)
- 281-15 请安 **qǐng'an** 请安是行礼问好。清代旗人请安时，右手下垂，右腿略微弯曲，左腿向前屈膝〈阉〉。满族旗人礼节，男子请单腿儿安，女子请蹲儿安〈高694〉。(现汉〈方〉)
- 281-16 小叶 **xiǎoyèr** 茶叶的优质品〈高896〉。茶叶中之细者〈齐30〉。
- 282-22 行好 **xínghǎo** 言其做慈善的事，也说“行行好”〈徐589〉。(现汉)
- 283-7 在乎 **zàihu** 决定于，在意〈作156〉。(现汉)
- 283-23 溜达 **liūda** 散步、闲走。也作“溜达”〈作80〉。“遛达”者，散步也。出门散步，曰出去溜达溜达〈齐147〉。(现汉)
- 284-13 逗嘴皮子 **dòu zuǐpizi** 互相争辩，耍贫嘴〈文693〉。
- 284-18 吉祥 **jíxiang** 清代一般官员见了宦官(太监)寒暄时，不是问“您好”，而是说“您吉祥”。旗人相见，也有互道“吉祥”的〈徐545〉。此本平常话，惟太监用之，盖太监问人必曰“您吉祥”。对太监说亦须用此二字〈齐195〉。
- 284-24 折腾 **zhēteng** 反复做某事，或同类动作反复进行〈作160〉。不安定也〈齐151〉。
- 284-27 关 **guān** 发放〈阉〉。(现汉)
- 284-27 钱粮 **qiánliang** 清代旗人的薪俸叫“钱粮”(“钱粮”的数目，有说是每月三钱银子、一包米，光绪末年的《小额》里说，“还有不到一两六的呢”，请教了几位“在旗的”，说法也不一)〈弥225〉。(现汉)
- cf. 关饷 **guānxiǎng** 旧时称领取工资。“关”是领取之意。“饷”本指军人的俸给，也称“关钱粮”。清代由满族统治中国，八旗兵入关有军功，旗人不论有无职业，每月按例“关饷”。其后，此制虽废，但此词仍被一些老年人用为领取工资的代称〈徐538〉。
- 285-9 调教 **tiáojiào** 教养；教育〈徐394〉。(现汉 **tiáojiào**)
- 286-1 老好人 **lǎohǎorénr** 指人随和、厚道，也指不肯得罪人，不讲原则性的人〈作76〉。(现汉)
- 286-14 量 **liàng** 经估计而断定。也作“谅”〈作79〉。(现汉)
- 287-6 赏脸⁽⁵⁰⁾ **shǎngliǎn** 给面子〈作112〉。旧时表示对方满足自己愿望的客套话〈口74〉。〈口

74)。

これらの詞語のうち〈現漢〉に採られていないものを見てみよう。

㊦ 早班儿、闲在、吉祥

これらは清末という時代を反映する詞語であり、このようないわば死語に相当する詞語は〈現漢〉に採録されないのが普通である。

㊧ 甩闲话、抖威风、逗嘴皮子

これらはこの「動詞＋目的語」の組み合わせでは〈現漢〉に見られないが、それぞれの動詞と目的語の詞語では収められている。このうち「甩闲话」は『秦氏三兄弟』を次のように書き換えたものである。

你这是冲谁骂咧子呢？（『秦氏三兄弟』）

→ 这是对谁甩闲话呢？（『茶館』）

「冲 chòng: 向」〈徐60〉や「骂咧子 mà liēzi: 不指名地漫骂。“咧” liē 变调」〈徐264〉によっても明らかのように、この部分は北京方言の「冲」「骂咧子」を普通話の詞語の組み合わせで、しかも独特の雰囲気を出そうとしたところである。

㊨ 折腾、赏脸

これらは〈現漢〉に収められているがその意味に少しズレがある。㊦の用例と考えてもよいかもしれない。

㊩ 候、邪、觉乎着、您哪、学 xiáo

そうすると北京方言は㊩の数例にとどまることになる。そして、これらもそれほど特殊な詞語ではない。

（二）俗諺

俗諺は次の通りである。

283-23 出门没挑好日子 chūménr méi tiāohǎo rizi 意思是不顺遂〈作20〉。

283-23 过了这个村可没有这个店 guòle zhèige cūnr kě méiyǒu zhèige diànr 意思是不要错过机会〈作50〉。

281-13 闭闭眼就过去了 bìbì yǎn jiù guòqù le 表示对某事容忍、忍耐、不必认真计较〈作7〉。

284-11 八仙过海，各显其能 bāxiān guò hǎi, gè xiǎn qí néng 传说中道家“八仙”在过海祝寿时各自施展长处，引申为谁有本领谁施展，充分发挥每个人的聪明才智，互相竞赛。〈作2〉。

281-13 好死不如赖活着 hǎosǐ bùrú lài huózhe 怎么活着都比死了好〈作53〉。在不好的环境下活着也比死了强〈俏95〉。

279-5 摇头不算点头算 yáotóu búsuàn diǎntóu suàn 摇头表示不同意，点头表示同意。指要明确表示态度〈俗869〉。

このような俗諺はいずれも巧みな表現である。模倣しようとしても使いこなすのが難しいが、いずれも普通話として何の違和感もなくそのまま意味は理解できるものである。

(三) 轻声

「轻声と儿化是北京語のひとつの特徴である」⁽⁵¹⁾ と言われる。

次は轻声について、舞台での音声と北京方言と普通話の辞書の記述を対比させたものである。舞台での音声は「詞語」欄に記す。——はその詞語が収録されていないことを表す。

词语	〈拼初〉	〈魯〉	〈现汉 78〉	備考
276-25 威风 wēifēng	wēifēng	wēifēng	wēifēng	
277-1 管教 guǎnjiào	guǎnjiào	guǎnjiào	guǎnjiào	
277-16 圣明 shèngmíng	——	shèngmíng	shèngmíng	明字一定要轻声〈弥〉
278-13 伺候 cìhòu	cìhòu	cìhòu	cìhòu	
279-17 生意 shēngyì	shēngyì	shēngyì	shēngyì	
280-15 和气 héqì	héqì	héqì	héqì	
281-8 闲在 xiánzài	——	——	——	
281-12 照顾 zhàogu	zhàogu	zhàogu	zhào·gù	
281-13 包涵 bāohan	bāohán	bāohan	bāohan	
281-19 奉承 fèngchéng	fèngchéng	fèngchéng	fèngchéng	
281-25 相貌 xiàngmào	xiàngmào	——	xiàngmào	
282-1 活动 huódòng	huódòng	huódòng	huó·dòng	
283-13 本钱 běnqian	běncián	běncián	běncián	běn·qián 〈现汉〉
284-2 脑袋 nǎodai	nǎodài	nǎodai	nǎodai	
284-8 财主 cáizhu	——	cáizhu	cáizhu	
284-26 庄稼 zhuāngjia	zhuāngjiā	zhuāngjia	zhuāngjia	
285-2 克扣 kèkòu	kèkòu	——	kèkòu	
285-9 调教 tiáojiào	——	——	tiáojiào	
286-8 交代 jiāodai	jiāodài	——	jiāodài	
287-14 畜生 chùshēng	chùshēng	chùshēng	chùshēng	

これらの轻声に読まれている詞語のうち、照顾、活动、本钱 は両読である。北京方言で轻声に読まれ普通話ではそうでないものは、威风、管教、圣明、相貌、克扣、调教、交代である。その他はすべて普通話でも轻声に読むのをを規範的⁽⁵²⁾ としている詞語である。

(四) 儿化

「北京語と普通話の顕著な区別は、北京語は多くの単語が儿化するのに対し、普通話ではそうでないということである」⁽⁵³⁾ とされる。

次は儿化について、舞台での音声と北京方言と普通話の辞書の記述を対比させたものである。舞台での音声は「詞語」欄に記す。——はその詞語が収録されていないことを表す。また〈儿〉欄の拼音表記は同書に従ったものである

词语		〈鲁〉	〈儿〉	備考
276-27 蹦蹦	liùliur	——	——	
276-1 唐铁嘴	Táng Tiězuǐr	——	——	人名
276-1 碗	wǎnr	——	wǎr	
276-6 生意口	shēngyikǒur	——	——	
276-17 茶馆	cháguǎnr	cháguǎnr	——	茶馆儿〈现汉〉
276-20 甩闲话	shuǎi xiánhuàr	——	——	闲话儿〈现汉〉
276-23 外场人	wàichangrénr	——	wàichǎngrár	外场人儿〈现汉〉
277-4 街面上	jiēmiànshang	——	jiēmiārshang	街面儿上〈现汉〉
277-14 李三	Lǐ Sānr	——	——	人名
277-21 出门	chūménr	chūménr	chūmèr	出门儿〈现汉〉
277-24 官面	guānmiàn	——	guānmiàr	
278-2 娘们	niángmenr	——	niángmènr	娘儿们〈现汉〉。“娘”“们”在口语中都应儿化〈张356〉
278-8 鼻烟	bíyānr	——	——	鼻烟儿〈现汉〉
278-15 两儿八钱	liǎng ēr bā qián	——	liǎng ēr bā qián	
278-22 到底	dàodīr	——	dàodiǎr	
278-25 命	mìngr	——	mìngr	
279-5 摇头	yáotóur	——	~ tóur	
279-5 点头	diǎntóur	diǎntóur	~ tóur	点头儿〈现汉〉
279-10 村	cūnr	cūnr	cūer	村儿〈现汉〉
279-10 店	diànr	——	diàr	小店儿〈现汉〉
279-10 事	shìr	shìr	shèr	事儿〈现汉〉
279-17 号	hàor	hàor	hàor	号儿〈现汉〉
279-23 买主	mǎizhūr	mǎizhūr	——	
280-2 玩艺	wányìr	wányìr	wányèr	玩意儿 ⁽⁵⁴⁾ 〈现汉〉。口语中“艺”应儿化〈张334〉
280-4 大衫	dàshānr	——	~ shār	衫儿〈现汉〉
280-5 裤褂	kùguàr	——	——	褂儿〈现汉〉
280-6 身	shēnr	——	shēr	身儿〈现汉〉
280-7 脑颞	nǎokér	——	——	
280-9 洋表	yángbiǎor	——	~ biǎor	
281-1 动杖	dòngzhàng	——	——	
281-11 一边	yìbiānr	yìbiānr	yìbiār	一边儿〈现汉〉

281-14	人缘儿	rényuánr	rényuánr	——	人缘儿〈现汉〉。口语中“缘”应儿化〈张 326〉
281-16	叶	yèr	yèr	yèr	
284-13	年头	niántóur	——	niántóur	年头儿〈现汉〉
284-24	作官	zuòguānr	——	——	
284-26	铁杆庄稼	tiěgǎnrzhuāngjia		tiěgǎnrzhuāngjia	铁杆儿〈现汉〉
285-2	份	fènr	fènr	fèr	份儿〈现汉〉
285-16	烟泡儿	yānpàor	——	——	泡儿〈现汉〉
285-17	跑腿儿	pǎotuir	pǎotuir	pǎotuir	跑腿儿〈现汉〉
287-15	地方	dìfangr	dìfangr	dìfangr	地方儿〈现汉〉

以上の例から判るように、「唐铁嘴」「李三」のように人名が儿化している例以外は、〈现汉〉に収められていない儿化詞は意外と少ない。

周知の通り、儿化によって語義の弁別が行なわれることもある。この場合は必ず儿化される。そうでない場合、名詞が儿化するときは〈小さいもの〉あるいは〈かわいいもの〉という意味を持つことが多いが、必ずしもそうでない詞語、例えば「玩意儿 wányir」もある⁽⁵⁵⁾。

儿化の語音も時代とともに変化してきている。趙元任によれば、年配者は「果儿 guǒr」と「鬼儿 guǐr」「滚儿 gǔnr」を区別するが、若い世代はすべて「guǐr」と発音して区別しなくなっているという⁽⁵⁶⁾。

林燾は、北京方言には語義の弁別をしない儿化詞があるが、これらの詞語が儿化するかどうかは個人の語感、好みの問題であるという⁽⁵⁷⁾。

そうしてみると、これらの儿化詞は、語義の弁別に支障を来たさず北京方言の語感を感じさせるものなのであろう。そして『茶館』ではそれほど多用されているわけではない。

(五) その他

その他、怎么着、啊、喝、喽 などの語気助詞によってより自然な会話表現を生み出している⁽⁵⁸⁾。これも『茶館』のことばの特徴のひとつである。

6. 老舍と普通話推進キャンペーン

舒乙は老舍の文学言語を六段階に分けている。それによると、第一段階は文言で、五四運動前後である。第二段階は白話文を必死で学んだ五四時期でだいたい1923年頃までである。第三段階は初期の口語体で、1920年代がそれに相当する。第四段階は白話文万能論時期で『駱駝祥子』がその代表作である。第五段階は方言文学を發展させようとした時期で『龍鬚溝』がその例である。そして第六段階が普通話を積極的に使用した時期で『茶館』がその代表作であるとする⁽⁵⁹⁾。

文字についても『茶館』では平易なものが使用されている。于是之は『茶館』の文字について次のように紹介している。『茶館』の会話と数来宝の部分合わせた字数は18461字で、そこで使用されている文字は多分『千字文』の範囲に収まるであろうから、中学生や高校生でも全く問題なく読める」と⁽⁶⁰⁾。

ここで言う『千字文』とは『平民千字課』のことであろう。『平民千字課』とは1000字を選んで初学の読本として編んだものである⁽⁶¹⁾。胡絮青によれば、老舎は『平民千字課』の千字で作品を書くことを心がけていたという⁽⁶²⁾。

語文改革にも老舎は関心を持っていた。1955年、中国全土で普通話推進キャンペーンが展開されると、老舎は積極的にこれに呼応する⁽⁶³⁾。1955年10月15日から23日まで、北京にて全国文字改革会議が開催され、老舎も出席して発言した。発言の中で老舎は「私の以前の作品には欠点があります。北京の方言を好んで使っていることが多いのです」と述べ、今後できるだけ普通の語彙を使うようにし、極力方言を避け、もし使わなければならない時はよく吟味してことばを選ぶようにしたい、と自分の決意を表明している⁽⁶⁴⁾。老舎は「自分の作品にできるだけ普通話を使い、方言使用を抑えることは重大な政治的任務である」と認識していた⁽⁶⁵⁾。

1956年2月、老舎は中央普通話推進工作委員会の7人の副主任のひとりに任ぜられ、規範化に関する発言が多くなる。「現在のわれわれの任務は方言の使用を抑え、規範化に尽力することである」⁽⁶⁶⁾と述べて規範化推進を訴えたり、簡体字についても「漢字は改革しなければならない」「簡体字を歓迎する」⁽⁶⁷⁾と述べて文字改革についても積極的に発言している。

7. 結語

老舎はかつて方言の効用を述べていた。

「口語のなかには多くの方言がある」が、「小説や話劇においては、人物や背景を鮮明にするためにどうしてもいくらかの方言を使わざるをえないことがある」⁽⁶⁸⁾として、多用を戒めながらもむしろ文学作品において方言の使用を重視していた。それが普通話推進キャンペーンとともに、既に見てきたように微妙に変化していく。そして、文学作品における方言と普通話の扱いを正面から論じる。老舎は自分の変化をこう述べる。

「以前は作品を書くにあたって、私は北京方言を好んで用いた。方言には生き生きとした力があるのだと思っていた。この二、三年来、私は主張を改め、方言をあまり用いずできるだけ普通話を用いるようにしたのだ」⁽⁶⁹⁾と。

だが変わらないことがある。朗読の重視である。老舎は述べている。

「私は作品を書きあげると、何度も何度も声に出して読み、他の人に聞いてもらうのだ。ちゃんと聞いてくれているかは別にどちらでもよい。スラスラと音読できるか、言葉遣いが正しいか、ぎこちないか、筋が通っているかどうかみるのだ」⁽⁷⁰⁾と。この姿勢はこれまで見たとおり、

老舎の一貫したものであった。

老舎は、中華人民共和国成立後、その時期ごとの政治的任務に応じた作品を書くことを自らの使命と考えていた。『茶館』も例外ではない。『茶館』は普通話推進に呼応して、そのことばに北京方言はほとんど用いられておらず、規範的である。それにもかかわらず話劇が北京味を感じさせるのは、音のリズムを重視した、俗諺、軽声、儿化の適度な使用によるが、それも多用しているわけではない。何よりも、政治的任務に呼応した作品であってもスローガンがちりばめられているわけではない。老舎が重視したのは作品のことばであり、そのことばの音のリズムである。作品は繰り返し朗読することによって完成稿となった。『茶館』のことばの面での成功も、演出家や俳優を前にした老舎自身の朗読によって可能になったのである。

〔注〕

- (1) 1956年2月27日から3月6日にかけて開催された中国作家協会第2次理事会議(拡大)で、周揚は報告を行ない「作家茅盾、老舎、巴金、曹禺、趙樹理都是当代语言艺术的大师」と述べた。周揚《建設社会主义文学的任务》《文艺报》1956年第5、6号[3月25日]。
- (2) 1951年12月21日に授与された。『老舎全集』第19巻、人民文学出版社、1999年1月、P.599。
- (3) 黄苗子《老舎之歌》《新文学史料》第3輯[1979年5月]。
- (4) 叶子《简练、深刻而又大众化》《语文建设》1994年第5期。
- (5) 于是之《老舎先生重视文学语言的规范化》《语文建设》1994年第5期。
- (6) 黎频《让人民群众好懂》《语文建设》1994年第5期。
- (7) 胡絮青《关于老舎的〈茶馆〉》克莹、李颖编《老舎的话剧艺术》文化艺术出版社、1982年1月、所収。初出は《戏剧艺术论丛》1980年第2輯。
- (8) 老舎《语言、人物、戏剧》《老舎文集》第16巻、人民文学出版社、1991年5月、P.52。初出は《剧本》1963年1月号。
- (9) 郑榕《老舎和〈龙须沟〉》《我与北京人艺》东方出版社、2000年10月、所収、P.75。
- (10) 陈徒手《老舎：花开花落有几回》《人有病 天知否》(以下《人有病》と略記)人民文学出版社、2000年9月、所収、P.73。
- (11) 《一家代表》《北京文艺》第3巻第1～2期[1951年10～11月]、第一幕のみ。全幕は《老舎剧作全集》第4巻、中国戏剧出版社、1985年8月、所収。
- (12) 舒乙《由手稿看〈茶馆〉剧本的创作》《十月》1986年第6期[11月]。
- (13) 于是之《老舎先生和他的两出戏》《北京文学》1994年第8期。
- (14) 舒济主编《老舎文学词典》北京十月文艺出版社、2000年2月、P.68。
- (15) 《秦氏三兄弟》四幕六场话剧 一九五七年，作者写完此剧后在北京人民艺术剧院征求意见，该院演、导人员建议以此剧第一幕第二场的“茶馆”为主线另写剧本。作者采纳了这个意见，写出了《茶馆》一剧，遂放弃此本》《老舎全集》第11巻、P.174。
- (16) 『一家代表』『秦氏三兄弟』を中心に『茶館』の成立過程を考察した論文に下記がある。石井康一「老舎『茶館』成立考」『未名』第10号(中文研究会、1992年3月)。
- (17) 郑榕《〈茶馆〉的故事》《我与北京人艺》东方出版社、P.76。
- (18) 公表は《电影创作》1994年第1期[1月]。
- (19) 舒乙《老舎未发表的电影剧本》《电影创作》1994年第1期。
- (20) 贝满女中数学教员 步春生《我家两年来的变化》《人民日报》1951年1月31日。
- (21) 齐锡宝《回忆老舎先生奉命写〈人同此心〉的前前后后》《电影创作》1994年第1期。
- (22) 前出、《人有病》P.74。
- (23) 《座谈老舎的〈茶馆〉》《文艺报》1958年第1期。
- (24) 《文艺报》编辑部《关于〈赶任务〉问题的讨论》《文艺报》第3巻第9期[1951年2月25日]。

老舍『茶館』札記（辻田正雄）

- (25) 老舍《剧本习作的一些经验》《老舍文集》第16卷、P.275。初出は《人民日报》1951年7月4日。
- (26) 金涛《〈茶館〉：怀念经典时代》《文汇报》2000年5月19日。
- (27) 前出、于是之《老舍先生和他的两出戏》。
- (28) 前出、《人有病》P.96。
- (29) 周瑞祥、1998年10月21日の口述。前出、《人有病》P.80に拠る。
- (30) 例えば、刘芳泉、徐关禄、刘锡庆《评老舍的〈茶館〉》《读书》1959年第2期[1月27日]。
- (31) 夏淳《〈茶館〉导演后记》（以下《夏淳》と略記）北京人民艺术剧院《艺术研究资料》编辑组编《〈茶館〉的舞台艺术》（以下《舞台》と略記）中国戏剧出版社、1980年7月、所収、P.218。
- (32) 北京人民艺术剧院《艺术研究资料》编辑组《后记》《舞台》P.321。
- (33) 前出、《夏淳》《舞台》P.220。
- (34) 蒋瑞整理《焦菊隐排演〈茶館〉第一幕谈话录》（以下《焦菊隐》と略記）《舞台》P.199。
- (35) 老舍《和工人同志们谈写作》《老舍文集》第16卷、P.6。
- (36) 老舍《关于文学的语言问题》《老舍文集》第16卷、P.100。初出は《文艺月报》1955年7月号。
- (37) 曹禺《我们尊敬的老舍先生》《人民日报》1979年2月9日。
- (38) 前出、《焦菊隐》《舞台》P.193。
- (39) 北京人艺1958年《老舍先生看茶館连排谈意见》记录手稿。前出、《人有病》P.81、P.84、P.86に拠る。
- (40) 王朝闻《你怎么绕着脖子骂我呢》《人民戏剧》1979年第7期。
- (41) 前出、王朝闻《你怎么绕着脖子骂我呢》。
- (42) 前出、《焦菊隐》《舞台》P.215。
- (43) 前出、《夏淳》《舞台》P.225。
- (44) 前出、《座谈老舍的〈茶館〉》。
- (45) 焦菊隐1959年6月執筆の未発表手稿。前出、《人有病》P.76に拠る。
- (46) 曹禺《老舍的话剧艺术》序《老舍的话剧艺术》P.3。
- (47) 冉忆桥《试论老舍剧作的第一幕》《华东师范大学学报（哲学社会科学版）》1983年第1期[2月]。
- (48) 岡部謙治「老舍『茶館』舞台上演録音テープの“拼音文字”化資料（附・簡体字）——その1」『語学教育研究論叢』第3号（大東文化大学語学教育研究所、1986年2月）。これは、1979年2月17日、北京首都劇場における、北京人民芸術劇院による上演のテープを“拼音文字”化したもので、実際の語音、声調をできるだけ忠実に反映させようとしたものである
- (49) 『老舍全集』刊行以前に『茶館』の版本を比較した主な論文に下記がある。
- ① 高橋弥彦『『茶館』の版本比較と時代的考察（その1）』『20周年記念論文集』大東文化大学教養課程委員会、1988年3月、所収。
- ② 高橋弥彦『『茶館』の版本比較と時代的考察（その2）』『語学教育研究論叢』第5号（大東文化大学語学教育研究所、1988年3月）。
- ③ 高橋弥彦『『茶館』の版本比較と時代的考察（その3）』『大東文化大学紀要（人文科学）』第27号[1989年3月]。
- (50) 《老舍全集》は「赏脸」に作る。これは底本にしたと思われる中国戏剧出版社版《茶館》（1958年6月第1版第1次印刷、1980年6月第2次印刷）が「赏脸」と誤植したものを踏襲したための誤りと思われる。初出の『收穫』及び四川人民出版社版《茶館》（1980年5月第1版）等がすべて「赏脸」に作るのに従う。
- (51) 鲁允中《普通話的轻声和儿化》商务印书馆、1995年5月、P.1。
- (52) 轻声の規範の問題については、拙稿「轻声について」『文学部論集』第88号（佛教大学、2004年3月）参照。
- (53) 胡明扬《北京話初探》商务印书馆、1987年1月、P.29。
- (54) 「玩意儿」と「玩艺儿」の原義は同じではないが、《第一次异形詞整理表》（2001年12月19日發布）では异形詞として「玩意儿」を推薦詞形としている。《第一次异形詞整理表說明》语文出版社、2002年1月、P.120。
- (55) 刘照雄《儿化詞的功能（三）》《语言文字周报》2004年3月17日。
- (56) 赵元任著、吕叔湘译《汉语口语语法》商务印书馆、1979年12月（原著、1968年刊）、P.33。
- (57) 林焘《关于汉语规范化问题》《中国语文》1955年8月号。
- (58) 老舍作品の口語については、下記に詳細な分析がある。
王建华《老舍的语言艺术》北京语言文化大学出版社、1996年1月、P.17。

- (59) 舒乙《老舍文学语言发展的六个阶段》《语文建设》1994年第5期。
- (60) 于是之《〈茶馆〉的第一幕》《语文建设》1995年第9期。
- (61) 大原信一『中国の識字運動』東方書店、1997年9月、P.54—P.58参照。
- (62) 胡絮青《用人民的语言为人民而写》《语文建设》1994年第5期。
- (63) 杜永道《老舍与推普》《语文建设》1999年第1期。
- (64) 老舍《大力推广普通话》《人民日报》1955年10月31日。《北京文艺》1955年11月号にも掲載。
- (65) 老舍《拥护文字改革和推广普通话——汉民族共同语》《老舍全集》第14卷、P.611。初出は《北京日报》1955年10月25日。
- (66) 老舍《关于文学创作中的语言问题》《老舍全集》第16卷、P.416。初出は《文学月刊》1956年10月号。
- (67) 老舍《文字改革是广大人民的迫切需要》《文字改革》1957年8月号。
- (68) 老舍《怎样运用口语》《语文学习》第2期[1951年11月]。
- (69) 老舍《土话与普通话》《中国语文》1959年9月号。
- (70) 老舍《人物、语言及其他》《解放军文艺》1959年6月号。

[付記]

本稿は、平成16年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(つじた まさお 中国学科)

2004年10月15日受理